



晴レ
ルデ



無理
でけへん
とは
言いたくない

左は硬い紙を重ねた年賀状。
右は「バー萩窪」の名刺。
上に箔押しをして、下のように出来上がる。

アートディレクターのシマダタモツさんの話を続ける。名前がカタカナなのはなぜ？

「デザイン公募で入選して、最初に名前が載ったのが漢字で嶋田保。パンチがない、というか。名前売りがたつたんで。ギリギリしてた？」「ギトギトでした」

師匠の事務所を辞めてからは、店のロゴを頼まれたら「俺の自由にさせてくれ。その代わりにカネは要らん」が口癖だった。

目指すのは「見たことのないものを作りたい」。だからカネにならない、仕事も流さない、仕事の大小に関わらず全知全能を傾ける。

で、「無理」とか「できない」と言われるのが嫌い。「可能性はないわけじゃない、まずやってみよう」と思っただけ。そのときはマリさん(築山方里子さん)も似ている。

マリさんも「やってみないとわかれへんから、でけへんとは言いたくない」と思うから、アサヒ精版印刷のスタッフにも「無理です」と言うな」と発破をかける。

似た者同士。シマダさんが「変わったことしたい時は相談に乗ってもらえる」と言えば、マリさんは「シマダさんが無理言ってるとは思ってない。こんなしたい、言ってるだけ。私は、それをできるかもって思うので」。つづいて「言ってみましたよ」とシマダさんに告げると「ホンマに無理やったら受けへんしね」と笑い飛ばすのだ。

シマダさんが事務所を引っ越した翌年の年賀状は、例のオリジナルの黄色とグレーを裏表に配し、硬い紙をミルフィユ状にちぎりに重ねた、とつともなく特殊な印刷物だった。もちろん、こんなのを頼めるのはアサヒ精版しかない。

担当の佐伯尚平さんが「裁断する機械の刃が壊れる」と泣きつき、最初の一枚から半分に厚みを減らし

ても、そんなのに歯が立つ刃はなかなかなく、佐伯さんが探しに探して実現した。

もひとつ、シマダさんらしい、細かいこだわりの仕事で、北新地の「バー萩窪」の名刺だ。漢字の横線が多いのを逆手に取ったデザイン。漢字の「萩」とアルファベットの「OGI」は白「窪」と「KUBO」はシルバーと色が違つ

写真を見比べてほしい。漢字もアルファベットも、いっぺんに印刷していないのがわかる。後から色付きの箔を圧着させる箔押しという工程が加わっているのだ。

これを手掛けたのがアサヒ精版の協力工場の「中西加工」(大阪市生野区。俗に箔押し屋さんと呼ばれる。社長の中西雅春さんは「アサヒさんはらう」と特殊な印刷しはるから、たまに困ってるんやけど」と苦笑いする。

こちらは手動のプレス機で箔を熱転写する。小さな名刺に一枚ずつ箔を押すのだ。「きれいに合わせるには100%無理なんです」と、この仕事を頼み込んだ佐伯さんが言うほど。特にアルファベットの「OGI」を、正確に真ん中に押すのは至難の技。微妙に左右

どっちかに寄るのだという。

中西さんは「これまで荒波を船が渡って、いくみたい、に……」とアサヒ精版からの仕事を荒波に例え、ひとつため息をついて「そうは言うても、変わったもん作りた、っていう気持ちは、みな持つてるから」と続ける。

みんな同じところを目指してるからできる、ことなのだ。シマダさんだって、この箔押しが難しいのはわかっていた

「難しいことをやらないと、新しいと感ぜない。チャレンジしてやらねえとね」と平然。とんでもない、世界ではある。